

海のスポート雑誌

人がげもまばらな晩秋の海辺。澄んだ青い空、遠く沖には白い帆。海からの冷たい風が、コートのをかすめる。ウィークデーの湘南は静かで、あの真夏の喧嘩がうそのようだ。海もやっと夏の疲れを癒し、落ち着きを取り戻している。

ブルーのウェットスーツのサーファーがひとり、遠い沖からやって来る波と戯れている。彼は朝早くから、夕陽が水平線の彼方に消えるまで、この海辺で過ごしている。心行くまで海とかわっていられる彼が、今は休日さえ海に会えなくなっている私には、羨しい限りだ。

「私たち人間は海からやってきた。だから僕たちの体の奥底には、海への帰巣本能がある。この棲み馴れぬ陸で長きにわたって喪してきたものを、人間は初めて海から取り戻すことができ。人間のいろいろな渇仰も、その充足も、そして、充足のもたらす至福をも」(船乗り、慎・ド・パッド)

一九七〇年、映画『ビッグウェンズ

デー』が、ロードショーされた。サーフィンに夢をかけた若者たちを通して鮮やかに描かれたアメリカの六〇年代の青春群像は、日本の同世代の人たちに共感を与えた。そのころから、日本のサーフィン熱は少しずつ高まっていく。その背景には、日本経済の高度成長によって、若者がサーフボードを買えるようになったということがある。

ここ数年、サーフィンの記事を載せた、海のスポート雑誌が、書店の雑誌コーナーの一面を占めるようになった。『ウインド・フラッシュ』『ウインディ』『サーフィンライフ』『サーフィンクラシック』『サーフィンワールド』『サーフ・マガジン』『ハイ・ウインド』『ブルー』『フリー・ライド』『ファイン』と数多い。これらの雑誌は、サーフィンに関するあらゆる情報が満載されていることと、グラフィックがとても美しいのが特徴だ。サーファーのプレイ、陽の光を通して青く透き通る波のトンネル。砕け散る白い波。紺碧の水平線にゆれる純白のウインドサーフィン。そんなグラフィックを見る度に、心は海に飛んでいってしまう。

片岡義男氏の小説に『限りなき夏』という小説がある。何人かのサーファタチが、ひとりひとりそれぞれに、いかに夏を追いかけ、エンドレス・サマーの幻をどんなふうに見ていくかというものだ。サーフィン雑誌は、その幻の水先案内人かもしれない。(T・H)

最近雑誌事情

『化粧文化』第13号(ポラ文化研究所)では「男の化粧」特集の序文の冒頭に、大宅壮一の「男の顔は履歴書」という名文句を引いていた。

大宅壮一がこの発言をした時に、今日の状況を予見していたかどうかはわからないが、昨年から今年にかけて新たに当文庫に寄贈されることになった数多くの雑誌のなかで、分野的に見て最も顕著に充実をはかることができたのは、ほかでもない男性モード雑誌と呼ばれる雑誌群である。

現在、継続的に寄贈を受けているのは、『X-MEN』(流行通信)、『DANSÉN』(スタイル社)、『CHEEK MATE』(講談社)、『MR・ハイファッション』(文化出版局)、『MENS CLUB』(婦人画報社)の5誌。さらにこれに近接する領域を扱う『BRUTUSスタイルブック』(マガジンハウス)、『プレイボーイハイスタイルング』、『MENS non-no』(集英社)も上げられる。

男性モード雑誌の起源は意外に古く、『DANSÉN』、『MENS CLUB』の2誌はそれぞれ昭和25年と29年の創刊である。巷が情熱的な南国のリズムに酔いマンボスタイルに身を固めた若者が颯爽と街を闊歩していた頃、すでにこれらの雑誌は彼らに最新のモード情報を提供していたことになる。

ファッション雑誌

それから30年以上も経過した今日、男性モード雑誌をとりまく状況は、古い雑誌をながめながら「モードは世につれ」などと呑気なことを言っているに似ない様相を呈している。「差異の崇拜はもろもろの差異の喪失の上に成り立つ」というJ・ポードリヤールの示唆にもあらわれているように大衆消費社会の加速度的な進行は、人々の生活空間から現実的差異をなくし個性をも均質化しつつある。しかしその一方で人々はつねに「本当の自分」すなわち他者との差異を求めつつづけている。

男性モード雑誌には「型紙」はついていない。そのかわりに紹介されている商品、商品を取扱う店のリストが付されている。定式化されたこのパターンは、男性モード雑誌が読者の選択と消費という行為に直接結びついていることを如実に示している。同時にこれは、今日すっかり定着した読者層を掴んだカタログの雑誌のはしりでもあった。

男性モード雑誌は、まるで鏡の国のようは大衆消費社会の明日に、いったいどのような「個性のありかた」を見せてくれるのだろうか。(Y・A)